芝翫

074828-000-5

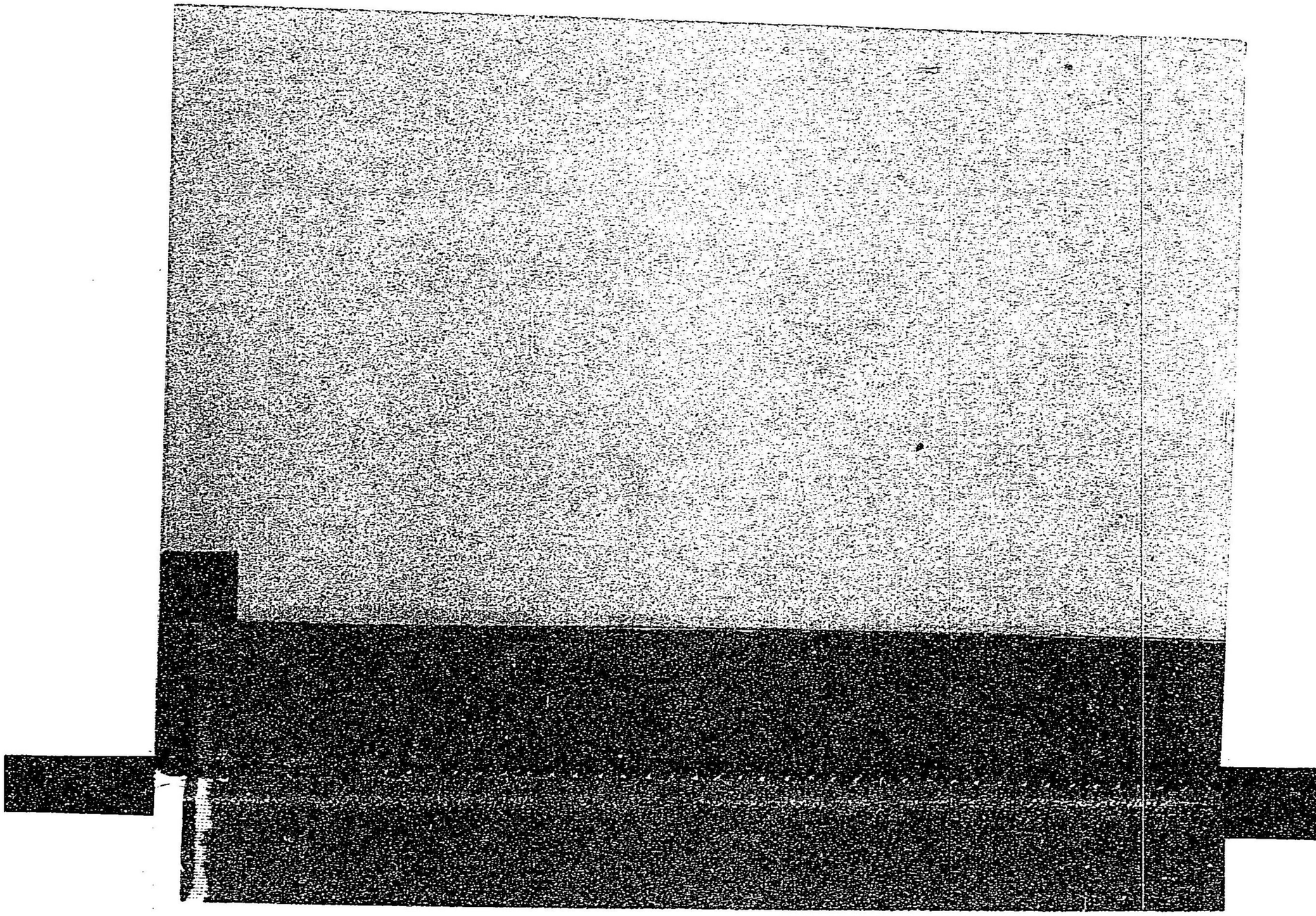
特53-183

芝翫

丸見屋

M42

CEK-0166

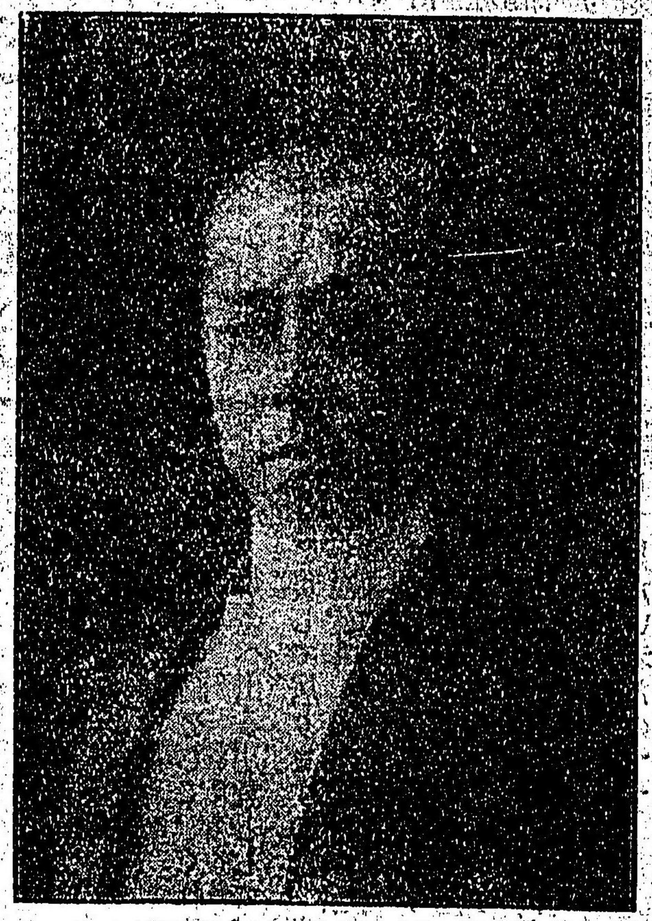


歌芝

御園文庫第貳編

特53
183

御園文庫



（最近の中村芝翫）

（壹）鉛毒といふ病氣の犠牲……二頁
（貳）天覽演劇、名題昇進＝發病……三頁
（參）福助の人氣と海水浴療法……八頁
（四）橋本國手と鉛毒の診斷……一四頁
（五）恐ろしき鉛中毒の實例……一六頁
（六）壁の袈裟と嬰兒の八つ橋……一九頁
（七）躍起となりたる團十郎……二二頁
（八）命の親は「御園白粉」……二八頁
（九）文明に伴ふ化粧料……三四頁
（十）實驗よりして化粧品の證明……四二頁

寫眞版

芝翫の扮したる役々△最近の中村芝翫△勸進帳の義經△女しばらくの巴△女楠の正行母△春雨傘の葛城△宗行卿△二十四孝の八重垣姫△源氏裳の上△妹背山のお三輪△烈女敷浪△最近の中村兒太郎

疵

(二)鉛毒こい〜病魔の犠牲

御園文庫の第三編には、化粧に就ての私の話をして、くれる樣にとの事です。なる程、私共俳優が、舞臺へ出る用意として、第一の苦勞は化粧で、顏の拵に浮き身を窶して居りますのは、世の婦人樣や奥樣方とは殆遠つた所はない位ですから、其事に就て心得て居るだけの事を、お話し申すのは、いとより易い事ですが、私としては其化粧のお話より何より、粗惡い白粉を使つた爲に、命にも係るほどの、恐しい鉛中毒を起して、うら若い福助時代よりつひ近年まで、苦に惱み抜いた因果な病氣の事を、憚多いが皆樣へのお心得の爲、悉しくお話して見たい考なのです。

あゝ鉛の中毒！　何の病氣が恐しいと言つて、この鉛の中毒症

に上越す、忌々しい、淺ましい病氣がありませうですか。それも假初に、使ひ馴れた鉛製の白粉が、いつの間にか皮膚を徹して、脈管を冒して神經を痺らせ、揚句の果が脊髓の中にまで、及ぼして仕舞ふといふのですものを、何の因果でその樣な、病魔の犠牲にならうとしたのでせうか。私は今に思ひ出して、實に身の毛も寄立つばかり、恐ろしく思ふのです。

其樣な害毒に苦められ、一時は起つ事が少しも出來なかつた私が、實に天の助か、惡い夢が覺めたやうに、無病息才の体に復り、尚私は先祖傳來、親讓の俳優を勤に、危い命を遂に免れる事が出來たといふ、本當に何の寶にも替へがたい最大の幸福を、何に因つて護たでせうか。其までのお話を、まづ順を追つてお話致す事にいたしませう。

(三)天覽演劇に名題昇進――發病

明治二十年は喜と憂とが、私の身に重り合つた歳です。此春の四月といふ月、皆様も御存知とは心得ますが、日本の演劇の歴史の上に、特別に記されなくてはならない事で、實に私共俳優が、一大光榮として擔ふのは天覽演劇のあつたのです。

忘れもいたしません、四月の二十六日より四日間、麻布鳥居坂の井上伯爵のお邸で、催されたのでした。申すまでもなく、故人の堀越(國十郎)さん、寺島(菊五郎)さんが頭領立つて居られたので、私は両伯父の相手に撰ばれまして、『勸進帳』の義經、『伊勢の三郎』で是も義經、『高時天狗舞』で側女衣笠、『吉野山』の道行では寺島さんの忠信で、私は靜御前。それから『土蜘蛛』に、胡蝶を致しました。この時靜御前にも胡蝶にも、振事になつて手を返しますのに、どうかすると痺れたやうになつて利かなくなつたり、舞摸樣の摺足の、足取がふらふらとして、危くなる事がありました。

今から思へば、鉛中毒の徴候といふものは、既に茲に兆して居たのですが、自分では、何一寸筋が詰まつた位にしか考へないので、それには天覽演劇といふ大切な舞臺ではありますし、がたゝ手足に多少の故障があつても、一生懸命になつて、無事に

勸進帳

義經に扮したる芝翫

この四日間を過ごしました。

此天覽演劇に續いて五月興行の市村座、新富座の両座に私の名題昇進披露がありましたのです。この芝居中に、申さば金箔附の鉛中毒に罹つたので、前に申した、喜と憂とが私の身に重り合つたのはこの時なのです。

その頃の市村座は、御案内でありませうが、淺草猿若町二丁目にありました。中日前後から新富座との懸持になりましたので、これには堀越さんも、私の名題昇進を披露の口上ゆゑに、遠路両座へ出勤して下すつたほどでした。

其の時の市村座の狂言は、一番目が川尻賓岑さんの御作『筑紫潟松千代咲』で、私は愛妾初花と、娘千代咲の役を致しました。それから中幕に『關の扉』があつて、亡父芝翫の關兵衛で、墨染と小町をして居たのです。で二番目は、松島屋(故人我童)さんの黒船忠右衛門でしたが、私は其所で新富座へ駈け附けて、『勸進帳』の義經になります。大切上の巻『浪花五人男』に、團菊左、亡父芝翫と出て貰ひまして、雁金文七になつて居る私の爲の、披露口上を言つてくれました。其下の巻が『一人娘に婿八人』で、矢矧の長者の娘淨瑠璃姫になりましたが、『仕抜』と言つて、大勢が一人々々に踊る中へ入つて、自分も短い振事をします。この時市村座でも新富座でも、前の天覽演劇に起つたやうな工合と變らないで、それでまたもう少し烈しい手足の痳痺を覺えました。それでも自分で、中々鉛中毒であるとは思も寄りませんので、毎日それなりで踊つては、些も氣にも止めずに、両座の懸持をして居たのですが、到頭その新富座の興行の末になつて、お腹が時々、烈しく痛むやうになつて來ました。

無論是は鉛中毒の著しい徵候で、是が募ると癪を起すやうになるのですが、まだ〳〵そんな事は一向心得ない頃なので、あゝ胃弱であらう。胃病が出たに違ないと言つて、例の氣にも止めずに

居るうちに、手足の痺よりは、お腹の痛の方が烈しくなつて、到頭懸り附けの醫者に見て貰つて芝居を休まなくては居られなくなりました。

(三)福助の人氣と海水浴療法

しかし御承知の通、その頃は堀越さん寺島さんを初め、私の父芝翫は丈夫で居りますし、申さば名優といふ名優は、星のやうに現れて居た歌舞伎座の舞臺でしたから、猿若町、鳥越、新富町を通じて、其大入繁昌は比べる時がない位、申さば芝居の黄金時代でした。其につれて、數ならない私のやうな者でも、福助が出ないでは御見物が納まらないと云ふ程の、涙の出るほど有難い人氣で、當時の中村福助は本當に、各劇場の引張凧でした。

其引張凧の眞最中、私は終に病の床に倒れて仕舞つたので、何所の芝居も此所の芝居も、大層困つたさうです。高が胃病位なら

溫石か何かで溫めて出たら、舞臺へも出られやうか位で、一時は自分もさのみと思はずに、出勤するやうに承知をして遣つて、さて樂屋入の時間が來ても、お腹の痛は烈しくて、とても寢床から起きる事が出來ません。其でも私が休んで仕舞つては、芝居の人

女しばらく

巴御前に扮したる芝翫

氣に障るから、押しても是非出勤して貰はないではと、各芝居の表方から人が來て、折角寢て居る私を、無理に起こして行く始末です。尤もそれも、強ち酷い考からではないので、全く商賣上已むを得ない、向としても切ない所があるのに違はありません。

是には不斷から、事の外可愛がつてくれました堀越さんや、寺島さんも、人情としては私を、休ませたいが山々でも、芝居の人氣といふ上から言つて、口を噤まなければならないので、二人とも私の顏を見るとは、病氣中を氣の毒なと言つて痛はつてくれました。

お腹の痛はさういふやうな風で、何所と言つて、遂げて分かるのではないのでしたが、時には刺込むやうにまでなりまして、食事は些もいけません。また自分はじめ家内の者も、胃病といふ名で居ますから、喰べられなければ喰べないでも可わで、お粥も碌にいけず、米湯といふほどでした。其のうちに段々衰弱して來まして、かうやつて眼蓋を引繰返して見ますと、赤味のある所も色は無くつて、全く白つ茶けて居たのです。

從つてまた、其頃の私の顏の色といふものはありません。蒼いと申すよりは、全く土氣色になつて居ますので、胃病とはいひながら、餘程体が快くないに違ないと言つて、家内の者の中でも殊に母が心配し、まあ何といふ否な顏色だらうねと始終申します。

私も、それゆゑに年寄つた母の胸を痛ませるのは、子としていかにも心苦しいので、是も孝行の一端と思ひまして、生燕脂を薄く顏へ塗つて、芝居から歸つて來ますれば、母も、此頃は餘程顏色が癒つて來たと言つて、少しは安心してくれました。

其樣に胃病位の病氣が、大分重つて來るばかりなので、堀越さん達も、段々心配のあまりに、いろ〳〵注意もしてくれました末、主治醫の池田謙齋さんとも相談の上、兎も角も其當時の大醫松本順先生に診て頂く事になりました。

松本先生が診て下すつて、其病氣の名は何とも仰はなかつたが幸ひ夏の興行も休の多い時になつたので、此際大磯の海岸に宿を求めて、朝夕海邊の空氣を吸ふと共に、海水へ入つて浴みをすると、体の健康に屹度可からとの、松本先生のお勸めでした。

堀越さんを初め亡父、家内の者も、それは至極可と贊成しまして、その八月初めて大磯へ、海水浴をしに參つたのです。これが又當今では大層流行する海水浴の矯矢であつたのも、不思議な緣ではありませんか。

まだ其頃は大磯も今のやうには、開けて居りませんから、有名な濤龍館も漸く普請に懸つた位の所で、他には宿もなかつた爲め、素人家で宮代新太郎といふ家に泊りました。それで可笑かつたのは、東京から福助が來たといふので、淋しい漁師町で居ながら、近邊は大層な人出で、宮代の家を覗いて私の顏を見ては、何だ、詰まらない！と言ひ合つて、すぐ〳〵歸つて行きます。まあ私の了見では、日本一の花形役者中村福助がわざ〳〵大磯へ來たのだから、それを大勢で見に來るのだらう位に、已惚れて居た所、

女楠

正行の母に扮したる芝翫

どうも見物人の樣子が少し違ふので、不思議だと思つて、宿の者から聞き糺させますと、それは大笑！東京から頭の大きな、お出

額の福助が來たといふので、垣間見に來れば、私が普通の頭の人間が居るので、これは思の外に詰まらないと言つて皆歸つて行くのだつたさうです。

此海水浴は全く、私の体を一時なりとも健康に復させました。その前後新富座の狂言の大切に、大磯の濤龍館を見せまして、私の病氣全快の口上を、皆樣で言つて下さる、といふやうな事もあつた位で、私がこの時の喜は、何に譬へるものもありませんでした。

(四)橋本國手ご鉛毒の診斷

所がそれは矢張仇だつたので、病氣は忽ち再發しました。時は忘れましたが、新富座の『忠臣藏』で、私は判官におかるをしてから、千歳座(今の明治座)へ懸持をして、『日高川』の清姫をした事があります。その前の庄司の館で、清姫が安珍の跡を追つて揚幕へ駈け込む、その時花道の附際の所で、ぱつたり轉んだなり手足は痺れて、腰が立たなくなつて、動もどうもならなくなつたのですが、御見物の前なり舞臺なり、氣を勵まして、這ふやうにして漸と揚幕へ入りましたが、其所へ打倒れて身動もならなくなりました。

此時は全く、自分も驚いた時で、同座して居た川崎屋(權十郎)さんも大變心配してくれましたのです。折もよく、この切懸に、堀越さんや私を負にして下さる、橋本醫學博士に診て頂く事になりましたのです。

その當時其縁から、私共は橋本醫學博士の事を、橋本の殿樣と申上げて居たので。日を極めて橋本の殿樣が、私の身体をすつかり診て下さいました末、やあ、これは大變だ、お前は鉛の毒に中てられて居る。鉛中毒症になつて居る。其原因は毎日鉛製の白粉で厚化粧をして舞臺へ出るから、いつともなく其鉛の毒が皮膚か

ら全身へ廻つて、その病氣になつたのだ。なるほど鉛製の白粉を濫用して、体の療治もしずに打遣らかして置いたらば、鉛の毒の爲めに神經が痺れて、烈しい脊髄病となるぞと仰になりました。

殊に例を引いて仰るには、獨逸のある市で、地の中に埋める水道の管を、殘らず鉛製のものにした事がある。それが爲め市中の人がその水を飲んで、皆鉛の毒に中てられたといふ事もある。その他職工から、何から、凡そ鉛といふ鉛を使ふものであつて、その中毒を受けないものはない位、恐ろしい害毒のあるものだからその際充分に療治しなくてはいけない。その治療法としてはまづ服藥は沃度加里でなくてはならないし、それと同時に、體内は兎も角皮膚中に殘つて居て、まだ吸收されて居ない鉛分を除く爲め、硫黄の湯に入つて、浴をしなくてはならないといふ事でした。

(五)恐しき鉛中毒の實例

俠客春雨傘

傾城舊城に扮したる芝居

なほ橋本の殿樣の御紹介で、(現今の醫學博士榊順次郎先生のお兄樣に當る)榊淑先生といふ方が、巣鴨の精神病院に勤めて居らつしやるのを、お訪ね申して、その頃はまだ弘く世の中に知れて居ない電氣器械で、殘なく私の身体を診察して下さいました。

柳先生の御覽下すつたところでは、無論中々重い鉛中毒に懸つて居るには居るけれども、不幸中の幸は、脉管は麻痺して居るが、鉛毒は神經まで冒して居ないから、從つて脊髓病となる事も、此分ではまづ無い見込であるとの仰でした。

而して柳先生のお話で、近い頃自分の病院で精神病の爲死んだ男がある、元大阪の俳優であつて、例の鉛製の白粉を、始終使つた揚句、鉛中毒を起して、皮膚から脉管を傳ひ、神經を冒して終に觸感の知覺を失つて仕舞つた爲、手先が痺れ切つて、巨燵の火の中へ右の手を突込んで、燒け爛れても感じがなかつた。これほど烈しい鉛中毒症になつた者であるから、無論脊髓まで冒されてゐるに違ないと、その者の死後解剖して、脊髓を截つて今に貯へて在る。どれほど鉛中毒の恐るべきものであるかを知る爲めに見せて上げやうからと仰つて、その死んだ大阪役者の脊髓中樞の斷片を顯微鏡にかけて、私に見せて下さいました。

すると、全体に赤黑くなつた中に、ぽち〳〵とある灰色がいつたもの、是は何ですと伺ふと、それこそ鉛の毒が脊髓中樞と言つて脊骨の心にまでも、及ぼして居る證據だと仰でした。

灰色の點々！これが鉛の毒！顏や襟、手足の上へ、假初に塗つた白粉の鉛分が、いつとなく皮膚から体中に吸ひ込んで、脊骨の心にまで浸み徹つて、腦溢血か中氣のやうに、感も失り、身動も出來なくなつて、死んで仕舞ふ淺ましさは！顯微鏡で見た恐ろしい實例、正眞の物凄い鉛の害毒を見た時の、私の心は、どのやうでしたらうか、まあ、どうぞお察し下さいまし。

(二六)壁の袈裟ご嬰兒の八つ橋

それほど恐しい鉛の毒を見て歸つて、この事を家内の者はじめ皆樣へ話しましたが、その頃の事でもありますから、誰一人私の言ふ事を信用してくれるものがありません。殊に亡父芝翫などが

申すのに、白粉に毒があつて、鉛がそんなに体に悪いものならば、お前ばかりではない、昔の役者でその鉛の毒に中てられた者が、大勢なくてはならないぢやないかとまで言つて、些も受け附けません。

殊にその前後は、例の通り、諸方の芝居の表方から人が來て、私を寢床から淡つて行くのは毎日の事ですから、私も、もう〳〵つく〳〵病氣が否になりまして、いかに人氣があつて、藝道が上手になられても、脊髄病で身を了るのでは仕方がない、あゝこんな苦しい悲しい思をする位なら、いつそ死んだ方が増であるとさへ、泣いて悶えた末には考へ詰めるのも、幾度であつたか知れません。

その中で、よく〳〵私を可愛がつて、痛はつてくれましたのは堀越さんです。私が舞臺に出るにしましても、なるべく動かせないやう〳〵といふやうな役ばかりを拵へてくれまして、一度は

鳥越の中村座で、『文覺勸進帳』の狂言に堀越さんの遠藤盛遠で、私が袈裟を致した事がありました。この時私は体を自分で、動かす事が些とも出來ませんでしたから、序幕の渡邊橋の橋供養に見物に出て、盛遠に思を運ばせられる所で、歩いては出られませ

宗行郷

宗行郷に扮したる芝翫

んから、堀越さんの注意で、私は白木の蓮臺様の輿に乘つて、身がれで上手から出て揚幕へ入りました。全然で壁の袈裟御前です。それから同じ那智瀧の場で、私の粉迦羅童子が雲の上へ立つて居ると見せて、その實体は後部に縛り付けられて、蓮の花を持つて立つて居る脚も結ひ付けでした。

それから後千歳座で、故人左團次さんの佐野次郎左衛門に、私は八つ橋太夫を勤めましたが、この時は袈裟の時ほどではなかつたのですが、序幕の見初に、道中の八文字はそつくり結へ付下駄なので、私が花道へ懸ると、あゝ〳〵可愛想に、福助は嬰兒のやうに、下駄を結ひ附けて居るわ。と仰る御見物の聲が私の耳へもちらり〳〵入るので、一層私は舞臺で泣きたい位でした。

(七)躍起となりたる團十郎

亡父芝翫はじめ、寺島さんも誰方も、全くの所その頃は白粉に鉛毒といふ事のあるのを、信用はなさいませんでした。しかし堀越さんばかりはお若い時分に御心得があつたのださうで。三十とか三十五とかの頃、鉛中毒を起して、半年も手足がぶら〳〵になつて居た事があつたさうです。其頃矢張松本順先生が、血清療法を以て漸く、根を切る事が出來たと言つてゞした。それ以來、鉛白粉は何でも毒のあるものだから、あまり白く塗つたものはしないと言つて、堀越さんは二枚目ものなどを逃げてお居での事があつたのでした。

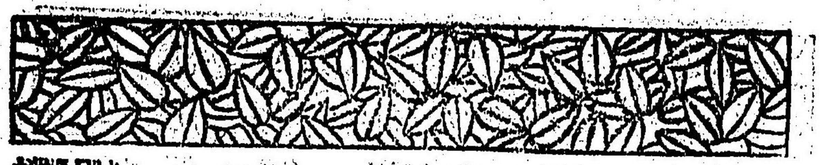
つまり私の病氣について、一番注意けてくれましたのは、誰あらう堀越さんお一人と言つても可い位で。松本順先生や橋本の殿様、延いては巣鴨の病院に、顯微鏡で恐ろしい鉛中毒の實例を見て、自分を警戒める事が出來たのも、全く以て堀越さんの深い恩と言はなければなりませんのです。

いえ、堀越さんの深い恩は、中々これだけでは止みませんので

す。堀越さんは私の病氣の事を始終思つて居て、どうにかして福助の体を丈夫にして遣りたいと心配して居られまして、なほ橋本の殿様に御相談を懸けたのです。つまりは私の病氣の治療法を專一に、なほ鉛の毒を帶びない、別製の白粉を發明して、自分を初め福助を助け、續いては俳優一般に、忌々しい鉛毒の苦の除かれるやうな手段を、取つて下さいますやうにと申し上げました。

橋本の殿様は、そのうちにも醫學にかけては御熱心な方で、また私共のやうな者にも、御同情の厚いところから、可し、自分の思ふ仔細があるから、その無鉛毒白粉の發明について、骨を折らうとのお言葉でした。

ところが堀越さんと私が草分で、それから俳優中に、續々この病氣に罹る者が出て參ります。只今は廢業て居りますが市川米藏に次いで、市川小團次、市川女寅、尾上榮之助（今の梅幸）その他段々下々に行くほど、例の手足の麻痺から、お腹の痛、丁度前に



自分が遣つて來た通りの事を、皆さんが繰返して居られます。さあ、これを見て躍起となつたのは堀越さんなのです。橋本の殿様に縋つて、日本にありとある俳優の生命を救ひ、鉛の中毒を撲滅して仕舞ふほどの、衛生無害の無鉛白粉を至急拵へて頂きた

本朝二十四孝

八重垣姫に扮したる芝翫

いと申し上げたのです。折もよし橋本の殿様の方にもお胸に秘めた事がありますので、その時のお言葉に、實は自分の縁類に、佛蘭西に永く遊んで、熱心に芳香化學を研究して來た人がある。この人が丁度近い頃歸つて來たのを幸ひ、賴んであるから、まづ消息のあるまで、待つやうにとの有難いお言葉でした。

佛蘭西から歸つたお方！誰あらう、現今の『御園白粉』の發明家長谷部仲彦さんでしたのです。長谷部さんはその以前からも時折、堀越さんの部屋や私の部屋へも、お遊びにお出になりますから、それと知れてより私からも長谷部さんへ願つて、是非特別の白粉を拵へて下さるやうに申し上げたのです。

尤も、たゞ拵へて下さいと申したところで、兎も角も是まで在り來りの鉛白粉を除く代に、完全な無鉛白粉を新奇に御發明を願ふのでございますから、長谷部さんも、橋本の殿様へ、いろ〳〵御打合もございましたらうし、また御自身としても、充分の御研究をお積みになつた末、遂に今日の『御園白粉』となつたのでした。

その間の長谷部さんの御苦心といふものは、何に譬へて申さうか、お話するのも憚多いほどでした。その當時には無鉛白粉といふと、少しも手掛はないのでして、歐羅巴亞米利加から、また支那あたりからも、研究の材料をお取寄せになつて、いろ〳〵と御研究なさいましても、その中より日本人の皮膚に付けてしつくり叶ふものを、見出す事が、出來なかつたといふ事です。そこでほいろ〳〵と御苦心の月日を重ねて、あらゆる白色のものに、樣々の試驗を施しても御覽になりましたが、いかにしてもかの有害な恐ろしい鉛製の白色でなくては、皮膚への附着が惡いばかりか、天から粉が飛び散つたり剝げ落ちたりしまして、とても實地に之を使ひ馴らす事が出來ないので、長谷部さんも一時、御失望をなさいます。堀越さん初め、私共もそれを伺つて、がつかり致した始末です。

そのうちに長谷部さんのお思ひ付で、ビスミットといふ藥を臺にして白粉をお拵へになりました。是は鉛製の白粉に比べて、その質は劣る事がなくて、而かも害が無いといふ事になつたので堀越さんが之をお試しになりますと、動もすると變色をしていけないといふ事でした。なるほどビスミットは硫酸瓦斯に遇ふと、變色を免れないので、長谷部さんもこれでは不可、一層の研究が入るとして、なほ三年の間、充分お調べになりました曉、初めて御苦心の効ある、無鉛無害の白粉を御發明になつたのです。

(八)命の親は『御園白粉』

時が丁度畏くも上　東宮殿下の御慶事を擧げさせられる時でしたので、侍醫局長の岡玄郷さんが、橋本の殿樣の所へお越しになつて、妃殿下が御大禮の御席へお出になる時の化粧料として、無鉛毒の完全な白粉があると聞いたが、一層丁寧に拵へて上納する

やうにとの仰でした。この事が長谷部さんに傳はつたので、長谷部さんは御自分の信ずる所を以て、侍醫局の藥劑師長山田菫さんへ、自製の無鉛白粉の處方を差出しまして、お許可をうけましたので、此上もない名譽の事と、早速出精して白粉を拵へて上納い

源氏物語

顔の上に扮したる芝翫

たしたのです。ところがまだ中々安心の行かなかつたのは、その後右の白粉が變色したから、早速出頭するやうにとの御用命があつたので。長谷部さんは思の外と驚いて出頭しますと、なるほど白粉を入れた壜の内側に、少し黒味が出ましたのです。恐る〳〵持ち歸つて試驗をして見ますと、是は光線の作用で變色したものと知れましたので、長谷部さんはなほ一層の御苦心をなすつて、研究に研究を重ねた末が、今日見られる白粉と同じ、完全な衛生無害、何所に一つ點の打ち所のない無鉛白粉が、彌〳〵發明されましたのです。

で、この事が上聞にも達しましたので、忝なくもこの白粉を、宮内省の御料に献納致す事になりましたし、續いては各内親王、各皇族方の御愛用になつて、些の御非難のないやうにもなり、それから以來今日まで引續いて、御用命を受ける次第となつたので。長谷部さんは茲に、又となく有難い名譽をお身に擔ひ、光榮ある

白粉の發明を記念する爲め、その竹の園生の高貴のわたりの御料の意味を含ませて、『御園』の二字をその上に冠らせる事に致したのです。

誠に、茲に『御園白粉』は產れ出たのですが、その原因はと申しますと、不圖した事から私が、その鉛の中毒の爲め、難病になつたのに寄る事で。堀越さんの一方ならない心配から。橋本の殿樣の御盡力によつて、長谷部さんがこの『御園白粉』の大發明をなさる事になつたのです。

『御園白粉』の大發明　やがて是が私の健康の、舊に復す動機となつたもので、その後の舞臺化粧の爲め、この『御園白粉』を欠かさず使ひましても、もう決して鉛中毒を起さないのは、全くそのやうな毒性の白粉でない明な證據なので、私は實に多年苦みに惱みぬき、終に命にも係はるといふ大難病を免がれたばかりか、只今のやうに全く無病な、健康な体になつたのも『御園白粉』が

あつた爲めで、この意味から言つて、私の爲に命の親とも謂ふべきは、全くこの『御園白粉』なので。私あつての『御園白粉』ならば、『御園白粉』あつての私とも言ふべきものであつて、私が『御園白粉』に對する大恩は、死にも更へ難く思つて居るものです。

まだその頃は世の中も進んで居りませんで、まだ〳〵弘く鉛製の白粉は用ひられて居りまして、俳優の多くは皆、毒と知りながら之を使つて居る始末、殊に近年に及ぶまで、關東關西を通じて、有毒な鉛製の白粉はまだ〳〵捌け口が少からないといふのですから、私はその當時から東京の歌舞伎役者と言はず、新俳優の皆樣と言はず、關東關西の役者衆の顏を見るとは屹度鉛毒の恐ろしいのを說いて、この完全無缺の、而かも御料の名譽さへある『御園白粉』の常用を勸めましたので、お蔭を以て日本全國を通じての俳優諸君が、舞臺化粧用としての白粉は、この『御園白粉』に限られるやうになりました。

妹脊山婦女庭訓

お三輪に扮したる芝翫

私はまた仲間の俳優諸君ばかりへでなく、引き續いてお心易くして居ります、お素人の奧樣や、お孃樣にお目に懸る度に、屹度『御園白粉』の御愛用をお勸め申して居つた結果が、今日では日本全國は愚、朝鮮、支那、それから歐米に渡つて居らつしやる、日本

の貴婦人の間にまで、この『御園白粉』が非常な歡迎を受けますやうになりましたのも、偏に長谷部さんの御功勞に因るところでして、それに連なる私共が、今日製造本舗の芝の伊東胡蝶園で拵へる『御園白粉』の繁昌を見聞いたしましては、之に優る喜びはないので、其『御園白粉』の繁昌に對しても、世の鉛中毒症の大部分は、全く、其跡を絶やすであらうといふ事は信じて疑はない所です。

（九）文明に伴ふ化粧料

これまでお話を致しました、序でもありますし、また弘く此『御園白粉』をお使ひになる、世間の奥様やお嬢様の爲に、憚多いやうですが、私の心得て居ります化粧のお話を致したいと思ひます。尤もこれは當初からの、御注文でもありましたので、茲に說き及びますのが順當でもありませう。

私の化粧のお話の基礎は、勿論『御園白粉』です。從つて『御園化粧品』一式に基いて、私の信じて居ります所を申し上げたい考へなのです。しかし、一應お斷り申して置く事は、化粧に就ての直接の私の經驗と申すものは、つまりは舞臺に立つて、御見物から御覽を願ふやう、言はゞ遠目でも顏の隈々、輪廓のはつきりとするやうにする化粧が專なのですけれども、一方自分の出立點を放れず、家内のものを初め御贔負皆樣から、化粧についての殆終のお心得を伺つて置いたのなり、何なりを一つに集めて、申さば御不斷の化粧法――舞臺化粧といふ事を離れて、傍で御同樣に膝を交へ、歩を共にしても、その顏の美を現して恨のない、實用から考へたお化粧法を申上げるのを、主意としたい考なのです。

尤も此頃、私が舞臺へ出て居りまして、それとなく御婦人方の御見物の、お顏を拜見致しまして、殆感心して居ります事は、一般にお化粧がお上手になつて、それは〳〵奇麗に、自然のお顏の美を現すやうとお努めになる、お嗜のほどが見えます。一時はこ

れも時代の潮流とか、何とか申して、お婦人方になつてさへ、隨分お化粧にお構ひつけにならずに、折角美しくならうといふお顔の、お手入も怠り勝で居らつしやいますのを、ちらほら見聞致しましては、あゝ、良くない現象だと思つて居りましたが、化粧品の需用は文明の程度に伴ふとか申して、この頃のやうに化粧といふ事が、一般御婦人方の間に、重きを措かれるやうになりましたのは、日本の文明の上から申しても、實に嬉しい出來事と存じます。

立戻つて此二十餘年前の、例の恐ろしい鉛中毒の時代を考へて見ますと、いかにその頃の文明の程度が低かつたか。自分はその非文明時代の渦の中に巻き込まれ、忌はしい病魔の前に、あはや人身御供にも上げられさうになつた昔を思ひ返しては、化粧のお話ばかりでも、皆様に不用意な事など、申し上げて宜しいでせうか。

烈女敷浪

細川奥方に扮したる芝翫

また『御園白粉』一派の無鉛白粉の出來ない先の、知らずに使つて居た鉛製白粉の肌觸の氣持惡さ！なるほどのりも相應に好く、のびも惡くないに違ありませんが、附ける時に冷やりとするばかりでも、何か、恐ろしい毒の汁であつて、それで皮肉が段々剝が

れるやうな氣がしました。而してその、鉛製白粉を附けた時の顔色は、蒼い上に黒味がかゝつて、それが肌に浸み透ると顔に汚點の出來るばかりか、取り分けて、眼の下の所謂白粉中毒、見るさへ第一に忌々しいのです。

過渡の時代とも申しませうか、只今の『御園白粉』が出來ます前にも、三つ五つ無鉛の白粉と稱へるものが出來ましたが、之を附けると、たゞのつぺらぼうのやうに、眞白に趣味もない顔になつて、生彩も艶もあつたものではありませんでした。

その後、長谷部さんの御苦心で、この『御園白粉』となつて以來、故人團菊をはじめ、俳優一同は全く、地獄の苛責を免れて、慈悲ある神機の賜を獲た心持で、それからと申すものは、この『御園白粉』一方向。よし鉛製でないものにしろ、うつかり他の白粉を使つて、又毒にでも中つた日には、それこそ今まで『御園白粉』の爲に救はれた自分の命を、再び死の谷底へ落すやうなものです

から、いかな場合にも、そのやうな危險に近づく事を止めて、他の白粉は、一切用ひない事にして居ります。

何と申しても『御園白粉』一式は、故人橋本の殿樣が後楯で、芳香化學者の長谷部さんが、學理といふ事を第一に、故人堀越さん寺島さんの實驗を重ねて、容貌を美しくし、健康を保つといふ上に、他に讓るものもなく、天下の一品となつて居る白粉ですから、私はじめ一同の俳優も、些の不安心もなく、心配もなく、樂屋遣として愛用して、更に御婦人方一般にお勸めする次第なので。

自体御婦人方の毎日のお嗜として、お化粧をなさるのに、是までよすと、たゞ白く生地を隱さうといふお考へで、例の鉛製白粉を、器用もなく、べつとりと塗り附ける一方で居らしつたのが、今日では、其御婦人方も自然の顔の美を現すやう、お努めになるやうにおなりなのは、何よりも頼母しく存じて居ります。

しかし、どちかと申すと、まだ化粧といふ事の標準が、今でも

きつぱり定まつて居ないのは、事實です。勿論御婦方人のお嗜好で、私は濃化粧が可、私は薄化粧に限ると思ふ、また私は顏色が蒼い性だから、いくらか赤味を見せなくてはなどの、いろ〳〵お考への違つたところはありませうが、一般の御婦人方がお採りになるお化粧がまだ規則立つては居らないかと心得ます。

規則だの、法則だのといふと、またひどく彌喧しいやうですが、規則だつた化粧、言ひ換へると、御婦人方が常のお身嗜にも、順序、秩序を立てることで物見遊山にお出かけになる時ばかり、思ひ出したやうに、鏡臺へお向ひになる事だけは全廢を願つて、常々家政をお忙りになる傍、また、お子樣を教育の餘暇、手まめに御容貌をお調へになる事に、お心をお寄せになつて、朝には屹度、『御園煉白粉』の蓋を明ける事。化粧下としては、『御園四季の花』は荒れ性の者、『御園の露』は脂肪性のものに、最もよく効能のある事などを、よく〳〵お心得になり、夕化粧は申すまでもなく、夜お休みの前には、屹度『御園クレーム』を引いてお置きになる事を、お忘れなくなさるといふやうに、殆終肌の營養を助けるやうにして居ると、いさ濃化粧の餘所行といふ時にも、決して白粉ののり惡い事はないので。而して昨日も今日も、變らない、美しい

（最近の中村兒太郎）

お顔になつて居らつしやる事が出來ます。

しかしまた、一方から言つて、あまりお顔のせつちをするのは、却て肌に小皺を寄らせたり、荒れさせたりする基ですから、御常用のものは、必らず『御園化粧品』一式とお極めになつて、その箱の中に挾んである用法を御覽になつて、常住に身嗜を、お怠りにならないやうに願ひます。

しかしまた鏡臺にお向ひになつても、牡丹刷毛、その他の、細々した刷毛をお使ひになるのが、いかにも臆劫なやうにもお考へでせうけれども、それは例の時々お思ひ出したやうになさるからこそ。日常のお身嗜に、必らず順序を立てゝなさる事にすれば、何の面倒も、臆劫もないのです。

（十）實驗よりして化粧品の證明

なほ皆樣が『御園白粉』『御園化粧品』をお使ひになる御參考までに、私が樂屋で遣つて居る間の經驗から、此所に持ち出しました寫眞で、御說明をいたさうと思ひます。

御案內の通り、この義經は『勸進帳』に出る役で、長唄のかゝりの『これやこの行くも歸るも別れては』で揚幕から登場する事になります。本業で行くと御見物の哀を買ふために、子役方が扮するやうになつて居ります。正史から言つては、無論取つ違へた話ですが、それでは能にもならないので、都合上然してあるのを採つて參つて、こゝに芝居の方でも、この義經は極若く拵へます。着附拵万端は、皆樣が御承知ですから、事新しくも申しませんが、顏の拵について、その當時天覽演劇の時分には、申すまでもなく鉛製の白粉を、襟から顏へ白々と塗つて、眼のまはりを腥燕脂でぼかしたものです。それ等が原因であの恐しい鉛中毒になつたのですから、もう〳〵一切鉛製白粉は願ひ下にして、實驗の上から『御園固ねり白粉』を臺に、淡紅色の『御園ねり白粉』を愛用して、ほんのりと眼の廻を赤くすると、人形のやうな死んだ顏などは出來ずに、活々とした美しい顏になるのです。

それからこの『女しばらく』です。これは御案内の通り、いつもの歌舞伎十八番として、市川家で致します『暫』を書替へて、昔瀬川菊之亟が出じましたのを、其儘私が市村座と歌舞伎座と大阪との三度にいたしましたので、巴御前といふ名の役で、『暫』を利かせて島田髷の鬢を車鬢にしてあります。而して紫帽子の下に、地の眉毛から放して、笹眉毛の先だけを見せるのも、一つは顔を大きく見せる爲なので、この顔の拵は無論『御園固ねり白粉』です。續いて此所に御覽に入れる寫眞で、『御園固ねり白粉』を臺に使ふ役は、八重垣姫、お三輪、また只今十一月興行でして居る『忠臣藏』の顔世、『三代記』の時姫は、皆此部のものなので。

『宗行卿』といふものがありますが、これはこの春、歌舞伎座で致しましたものですが、元は大阪朝日新聞の懸賞當選脚本で、渡邊霞亭先生のお弟子の、中原指月さんといふ、今は名古屋での文士として、聞こえて居られます方の御作でした。近く座附立作者の榎本破笠さんがお書きになつて、お蔭で同樣の好評を獲ました、

『經島娘犧牲』に出る重盛、また一両年前にいたした、『平重衡』、皆こゝ等邊の役と同じ型で、髭その他のうつり上、素面に近い拵へは、これに持つて來いの『御園との粉色白粉』を使ひます。

『御園との粉色白粉』は極近頃、芝の伊東胡蝶園から製造されはじめたもので、無論長谷部仲彥先生の御發明ですが、これがまた滅法界調法なものです。なるほど硝子箱の蓋を明けて、たゞ見たゞけでは、赤茶けた土色をして居て、その上じく〳〵したもので、一方に『御園ねり白粉』を御信仰のお方が、初めて見た目には、どうかとのお疑もありませうけれども、お顔へ付けては決してそんな赤茶けた、土氣色のまんまではないのです。之を使ふのに、最も便宜なのは水刷毛です。水刷毛に一旦水を含ませて、片方のとの粉色白粉を程よく掌に取分け、そこで水刷毛でこなして、眼のまはりから段々と塗るのです。然しますと、今まで赤つ茶けて居たものが顔にかゝると、丁度その面色に釣合つて、例の黄色人種といふ、日本人の肌にしつかりと出會し、その中に艶が出て、

態とらしくない色白に見えるといふ、他々の白粉には、類も眞似も出來ない効能を持つて居る白粉なので。その調法なといふものは、私が立役ものをいたしますのを第一に、歌舞伎座の幹部では八百藏、猿之助、團藏、羽左衛門、高麗藏、松助などの諸君の喜び方といふものはありません。これまで樂屋遣としてあつた砥の粉で、荒れて〳〵、その上肌に汚點が出來るので、困つて居る矢先に、この『御園との粉色白粉』が出來ましたので、一座は愚、新舊の俳優は這二無二、この『御園との粉色白粉』を使ふ事になりました。

從つて御素人方として、この『御園との粉色白粉』をお使ひになりますと、第一夜の燈の、電氣や瓦斯で、お顔の色を蒼白く見せますのを避けるのに、極宜しいので、傍からはさながらの美しいお顔の地色を見る思がいたします。使用法としては前にお話した通りですが、また水刷毛でない時には、どういふ工合にするのが可いかとのお訊ねですと、無論手先が極よろしいので、例の掌で解いた『御園との粉色白粉』を指先に附けて、眼のまはりから總体へ、何方かといふと、押付ける心持で塗るのです。而してその後を、『御園粉白粉』の純白色を、叩き刷毛に含ませて、際立たないやうに、鼻筋を通して補へば、それで立派なお化粧が出來るのです。

此寫眞で見ますと、女方でも、『女楠』の正成の室、『敷浪』などは年增役ですから、勢『御園との粉色白粉』を臺にする事になるのです。それから近くは前申した『經島』での早枝の母伏屋、これは同じ年增でも、二十五六といふ若い所ですから、その『御園との粉色白粉』に『御園固ねり白粉』を交ぜて使ひました。御素人方でもこの方法で、お歳に從つて『御園ねり白粉』に『御園との粉色白粉』を交ぜて、加減してお使ひになるのは、また至極好い事だと信じます。

伜の兒太郎は御覽の通り子役ですから、始終弟子のものを附添はせ、私が指圖をして『御園固ねり白粉』を塗らせますのですが、不斷は暴れ放題に押放してあるものですから、眞黑な顔をして居りまして、初日となると、いつも白粉の附着が、どうかと思

ひます。しかし、そこへ行つては『御園化粧品』の氣安さ。それ〳〵の適切なものが出來て居て、濃化粧の時には『御園の菫』、薄化粧の時には『御園クレーム』を白粉下にさせまして、その上へ『御園固ねり白粉』を塗らせますと、それは〳〵著しく、よく乘つてよく延びます。これこそ他の無鉛白粉が、とても〳〵及びもつかない特長のある所です。

『御園の露』といふ化粧水は、白粉を溶くのに極好い水で、殊に脂肪性の私は之を塗りますと、顏がさら〳〵として得も言はれない好い心持なので、樂屋に居ると、これを白粉の溶き水にして、家内に歸ると、また之を朝夕の常用として居りますから、さしも脂肪顏も、之を附けて居ると、すべ〳〵と好い肌になります。

それに丁度この『御園の露』と對して『御園四季の花』といふのがあります。あれを附けるとまた、荒れ性の者に最も好いので。宅では亡父芝翫時代から附添つて居る金公と申すのが、歌舞伎座の表二階の化粧室から、いつでも『御園四季の花』を分けて貰つて

來ましては附けて居りまして、手足の荒を癒すのには、實に不思議なほどよく利くと申して、久しい前から宅の女中共一同へ、その金公が勸めて、この『御園四季の花』を始終使はせる事になつてから、冬向眞綿や、繃子などに觸れて、ばり〳〵するやうな事が些もなく、奇麗な顏や手足になつたと申して、喜んで居ります。

それにあの『御園四季の花』が、もう一つの特長は、火傷に効があるといふ事で、これはまた一座の藤間（高麗藏）君が實驗で、現在舞臺撮影の爲めに出張した寫眞技師が、過つて閃光器に觸れてマグネシウムの爲に腕に火傷をした時、取敢ず『御園四季の花』を塗らせて、その苦痛を去らせ、其上全癒させたといふほどのもので。藤間君もこの『御園四季の花』の効驗の著しいのには、大層驚いて居る位です。

『御園白粉』と『御園化粧品』！お話し申したほかにも、同じ『御園』の名の下に出來て居る香水、香油、齒磨等も多くありますが、今こゝで私が喋々しく申さないでも、それこそいづれも樣が、疾

うより、それらの『御園化粧品』については、御實驗のある所なのですから、私は茲に、このお話の結として、たゞ明言いたします。

私の爲には、實に是命の親として迎へる『御園白粉』！かの、一方にはすさまじい勢を以て猛威を振ひ、劇界に立つ者悉く、其忌はしい害毒の壺の中へ、あはや封じ込められやうとまでせられた時、此神樣のやうな『御園白粉』の發明があつた爲に、敵とも妖魔ともあるべき鉛中毒症を、全く打滅ぼす事が出來た今日となつては、偏に故人堀越の伯父、寺島の伯父の大恩に感じますばかりか、故橋本の殿樣や、長谷部さんに對して、深く謝すべきもので。私は茲に故人の遺志を受偏いで、更に世の中の奥樣、お孃樣方の前に、『御園白粉』各種、續いては『御園化粧品』一式の、良質絶品な事を證明して、一層弘く、仰せ交されて此の御愛用を、私から偏に御依頼する所なのです。

歌舞伎座十一月興行の樂屋に於て

蘆群堂主人筆記

高貴の御料に召させ給ふ

御園白粉と化粧品

諸新聞紙上及び、御園文庫の毎編に於て、既に定評あるが如く、また日本の婦人方は現在皆『御園白粉』『御園化粧品』を愛用せられて居る有樣である。實に上 高貴の御方々より、社會のあらゆる階級を通して、『御園』一式の化粧品は、その命ぜらるゝ鏡臺前に、必らず備へられてあるほどであるが、今その定價と對照せて、仔細にこの『御園白粉』と『御園化粧品』各種の、使用法を左に掲げる事とする。

御園ねり白粉

定價（壜入 金二十錢。 特製 金三十五錢。 金七十五錢。 金二十五錢。 金五十錢。 金一圓。 金三圓。）

『御園ねり白粉』は最多く、また最も弘く世の中に行ばれて居るもので、白粉に混化粧

用、薄化粧用の別あり。また色に純白と淡紅色との、二つがありますけれども、お顔の若白い方や、夜の化粧には、淡紅色の方で化粧するのに限ります。而してこの白粉の特長は、世間に知られて居る通、幾遍塗り重ねても隠立たず、伸の好い上、附着が可くて、肌を荒さねばかりか、消毒殺菌がしてあるので、皮膚病の豫防にもなる爲、彌々需用が多くなるばかりなのです。

御園固ねり白粉

定價 硝子箱入 金四十錢。金七十錢。

『御園固ねり白粉』は元、俳優が舞臺へ出る時の、樂屋化粧用に拵へたものですが、只今では却て貴婦人方から、濃化粧料として持囃されて居ます。之を溶くのには、ときの『御園の雫』か壺に、塗刷毛でこなし、襟から顔へと、加減よく塗り擴げれば、淡紅色の美しいお化粧が出來るのです。而かも襟白粉にしても、着物に附かないのが、他の白粉に優る所です。

水白粉『御園の月』

定價 壜入 金二十五錢。金五十錢。

水白粉『御園の月』は專ら薄化粧料として常用せらるゝものですが、是にも純白と淡紅色とがあります。用ふる時には、まづ、よく〳〵其壜を振動かし掌へ受けて、襟から顔へと、薄に塗るのです。殊に朝夕顔を洗つた後へお使ひになると、化粧の手數も省けて、便利此上もありません。

粉白粉『御園の花』

定價 紙包 金十錢。紙函 金二十錢。壜入 金五十錢。

粉白粉『御園の花』は洋風の化粧、和風の化粧兩方に用ひられる粉白粉で、是もお好によつて、其色には純白、淡紅色の兩種があります。而して、ねり白粉か、固ねり白粉で、化粧した上へ、鼻叩き刷毛にこの白粉を含ませて、ぱ、ぱかしに使へば上乘です。

御園はき白粉

定價 紙箱ポット附 金五十錢

『御園はき白粉』は洋風薄化粧專用のもので、薄く美顔料『御園クレー』を引いて拵さ

取つた上へ、箱に入れてあるポットで刷き付けるやうにする。また隠し化粧用としても、至極簡便な白粉です。

御園この粉色白粉

定價　壜入　金四十錢。樂屋用硝子器入　金六十錢。金一圓。

『御園この粉色白粉』も、前に記した『固れり白粉』と同じやうに、樂屋邊のものとして稱へたのが、今では一般の化粧料として、大層持囃されて居るのです。尤も通例の白粉とは全く色も變つて居て、砥の粉の色を帶びて居る爲に、たゞ目で見ては、あまり黄色味が勝つて居るやうですが、これを掌に取つて、水刷毛を上手に使ひさへすれば、顔の地色に しつくりと合つて、落着くばかりか、自然の肌の美しい艶を見せて、在來の砥の粉のやうな荒れもなく、夜の化粧料として、一度使つては、とても他に見替へるものが無い位、全く天下逸品とも謂ふべき白粉です。

御園なでしこ

定價　紙包　金十錢。かくし化粧用　金十錢。

『御園なでしこ』は懷中顔直し料の打白粉で、化粧した顔の補には之に上越すものはないのです。殊に芝居見物遊山には、必ずなくてならないもので、『御園四季の花』を付けた上に、之で叩くと、最も早手廻の瀟化粧さへ出來る位です。それから別の用法としては、汗母除、爛れなどを防ぐのにもよく、また三味線の棹の打粉にすれば一層便利で、よい匂ひが附きます。

御園四季の花

定價　小壜　金二十錢。大壜　金五十錢。

化粧水『御園四季の花』の著るしい効驗を、高貴婦人社會は勿論、俳優間、花柳界に、知らぬ方やはありますまい。朝夕の身嗜として顔を洗つた後に此『御園四季の花』を塗り、手にも好い程を付けて置けば、漸く近づく肌寒にも、皮膚の荒を防ぐのは更なり、瀟化粧や隠し化粧の白粉下にする時は第一白粉の附着も伸暢もよく、美しい艶を顔に保たせ。なほ之を絶えず常用にすれば、顔に小皺の寄る事がなく、肌理を濃に、麗はしい色澤を現す無類の化粧水です。取分け蚊蚤喰ひに好く、火傷をした折、その痛み所へ『御園四季の花』を

御園の露

定價　小瓶　金十五錢。　大瓶　金三十錢。

是非とも御ためしあらんことを。

『御園の露』は化粧水の最も秀でたるものにて、『御園四季の花』に優ります。それゆえ皆様方の御婦人に御愛用願ひたいのです。此所にいふ『御園の露』とは、使用法さへ正しくさえ煙草や雑巾などの汚れを拭ひ清めの後、また濡上りに塗つて置けば宜しいのです。なほ一名『御園うるおい水』とも名づけてあるだけあつて『御園白粉』や『御園白粉』を溶き伸ばすのに使へば、白粉の渡り滑りの手加減も自由に出来ます。其上肌理を美しくする事は『御園四季の花』に劣らない白粉下及び化粧水中の両大関です。

御園の雫

定價　壱人　金十錢

『御園の雫』は洋風化粧用の白粉下ドランケンの第一に、洋風の化粧に、和風の化粧に、

これなくてならないクレームです。化粧に前ち、指先へ極々少量取つて掌で伸ばし、好ほどにこなして襟から顔へ、うつすりと平に撫で延ばし、其後を柔かな紙か布、革で軽く拭き去るのです。その上洋風の濃化粧がお望ならば、『御園粉白粉』をポットに含ませ、刷きつければ可いので。和風の濃化粧ならば、『御園の雪』の上へ『御園れり白粉』か『御園粉れり白粉』を塗れば、夫は〳〵目に立つほど奇麗に顔の生地を粧ひます。

御園クレーム

定價懐中用金十錢。硝子器入 金二十錢。同金五十錢

『御園の雪』の濃化粧用につれて、薄化粧用の白粉下としては、『御園クレーム』に優るものはありません。洋風和風の化粧料に用ひられるクレームで居て、また美顔料として荒れ性の人に効能のある事は、『御園四季の花』と同じです。而して塗方は前の『御園の雪』と變りはありませんが、粉白粉れり白粉の他に、水白粉『御園の月』を塗つても、差支はないのです。なほ毎夜の寢しなや、湯へ入られないやうな場合に、此『御園クレーム』を薄く付けて柔かい紙、布で拭き取つて置けば、始終滑々した肌合になつて居ます。但此クレー

ムを用ひて白粉を付る時には、必ず能く拭取るか、又は乾いて、肌がすべ〳〵になつたら、白粉をおつけ下さい。

御園香精

定價　金三圓。金五圓。

『御園香精』は輸入香水の欠點を補ひ、他品に優るとも劣る事のないものです。且粹。得もいはれない尊い、床しい馨を含んで居て鼻を刺すやうな所もなく、誠に香水中での香水を更に精選したのは此『御園香精』です。使用法ばかりは別に變りもなく頭髪や着物、さて所持品に振かけるのですが、頭髪へかける時は、壜の口へ半分ほど拇指をかけて振り出ハンカチーフで壜口を押し當てゝ逆にし、着物には肌着の上前の襟裏へ、壜口を當て退すなどは御使用の方々が、疾くに知つての上の事です。

御園の橘

定價　小壜　金五十錢。大壜　金一圓。

『御園の橘』を措いて、他に化粧香水の最上なものがありませうか。日本人の殊に好む果の花から、その上品な露を取つて精製したもので、朝顔を洗ふ時は申すまでもなく、入浴の折、洗面盤か、小桶へ五六滴を滴らして使ふか、手拭に之を湿して、絞つて使ひ、又好い、ほどを浴槽の中へ振り出せば、花橘の露で身内を洗つたやうな清い心持になります。床、枕に振りかけるも可し、寢衣に付けるも至極好いのです　申さば萬能の化粧香水です。樣が鏡臺の傍に、お備へにならなくてならないものは此『御園の橘』です。

御園香油

定價　壜入　金三十錢、金五十錢。

『御園香油』は零度以下の嚴しい寒さにも凍らず、百度以上の烈しい暑さにも、一切腐つた例がないので、弘く上流の貴婦人方始め皆樣に愛用せられて居ます。而して何よりも、日本人の髮の毛に最も好く叶つた水油で、さら〳〵として沾り氣さいふものが塵程もなく、着物や夜具や、枕などを汚す事がないばかりでなく、毛髮を黑く艶を出し、雪脂れたやうに止め、毛を多く房々させるだけの効驗があるので、一旦『御園香油』を用ひた

美容と健康とを目的とする優良化粧品

他品に替へる事の全くないのが誇とすべきところです。

御園齒磨

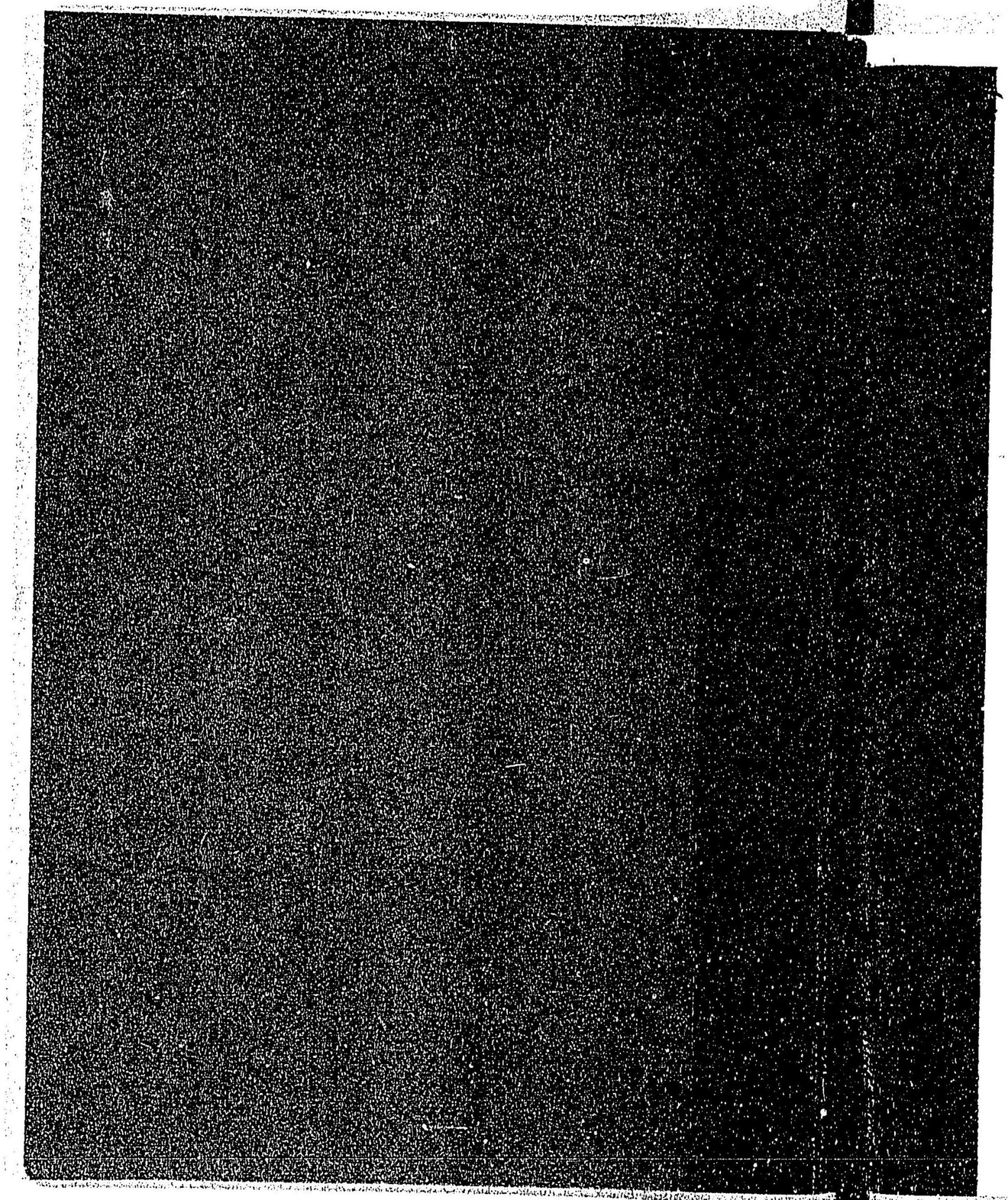
定價　壜入金二十錢。硝子器入　金五十錢。

白粉さいはず、化粧料さいはず、香水さいはず、ついで社會に大なる歡迎を受けて居るものは『御園齒磨』です。齒の保全をよくし、美しさを增させるのを專一に、口中を清涼にさせるのを兼ねて、最も進んだ方法を以て、撰り拔いた原料から調合したので、明はば齒磨としての最上最良の効能のある性質のものから、更に取分けて拵へたもので、之を使つた後に、直ぐお茶を飲んでも、味に障りがないと云ふ、珍らしい特色のあるのは『此御園齒磨』です。

261
37

明治四十二年十一月廿五日印刷
明治四十二年十一月廿七日發行
東京市日本橋區濱町二丁目十二番地
編輯兼發行人　山岸惣次郎
東京市日本橋區橘町四丁目十五番地
發行所　丸見屋商店
東京市京橋區竹川町一番地
印刷人　柴田喜一
仝區仝町仝番地
印刷所　文玉舍
御園文庫定價（一部金拾錢十二部金壹円）郵稅二錢

複製不許

R-69

鶯のうらゝかなる音に、鳥の樂、花やかに聞き渡されて、池の水鳥も、そこはかとなく囀りわたるに、愁になりはつるほど、飽かず面白し。蝶ばましてゝ、ゆかしき樣に飛立ちて、山吹のまさのもとに、咲きこぼれたる花の影に舞ひ出づるを。宮の亮をはじめて、そるべき上人ども、綠さりつゝきて童部に賜ぶ。鳥には櫻の細長、蝶には山吹がされ賜はる。（源氏物語胡蝶の卷）